久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第20号（2003）

薩隅方言におけるラ行音・ダ行音の変異について
― 肥筑方言を参照しつつ ―

崎　村　弘　文

On the Variants of r- and d- in *Satsugū* 薩隅 Dialect
― Comparing with *Hichiku* 肥筑 Dialect ―

Hirofumi SAKIMURA

【要旨】 4．おわりに等参照。

【キーワード】 薩隅方言、肥筑方言、ラ行音、ダ行音、変異。

0．はじめに

薩隅方言におけるラ行音の変異については、＜ダ行音に変わりやすい＞とか＜子音が脱落して［i］になることがある＞といった記述[1]が成されることが通例であるが、語頭・語中尾による違いなど詳細な述定は、不思議なことにいまだ成されていないのが実状である。さらに、これと関係の深い薩隅周辺部のダ行音の変異についてはほとんど云々されないというのが、管見の及ぶかぎりの事実である。また、この二種の変異を理解するのに肥筑方言の類例を参照することが甚だ有益であると思われるのであるが、そうした考察も例を見ない。以下、この問題につき具体例に沿って考えて行きたい。

1．薩隅方言におけるラ行音の変異

橋口満『鹿児島県方言辞典』[2]より例をひろってみると、以下のようである。

◎ラ→語頭ダ、語中尾ラ（一部タ）

ダイスカレー：名詞。A＜老＞…。（大隅）曽於郡大隅町。／ダジオ：名詞。A：＜老＞…。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ダチモナカ：形容詞。だらしない。（薩摩）薩摩郡鹿島村。（また、ダッモネ：形容詞。B。埒のあかない。くだらない。ラチモナイ（埒・無）の転訛。…（大隅）曽於郡。）／ダッ：名詞。B。楽。気楽。ラク（楽）の転訛。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ダッキショ：名詞。A$_{ママ}$。落花生。…。（薩摩）各地、（大隅）各地、（諸県）各地。／ダッキュ：名詞。A$_{ママ}$。辣韮。（薩摩）鹿児島市上福元町、日置郡東市来町、薩摩郡宮之城町、川内市鳥追町、（大隅）曽於郡大隅町。（また、ダッキョ：名詞。B。辣韮。…。（大隅）曽於郡大隅町、（諸県）東諸県郡高岡町。）／ダンガサ：名詞。B。洋傘。蝙蝠傘。…。ランガサ（蘭傘）の転訛。蘭は西洋の意。（薩摩）鹿児島郡三島村硫黄島・十島村宝島、（大隅）曽於郡大崎町・大隅町、

（諸県）小林市東方。／ダンギ：名詞。B。大きな杭。ランゲイ（乱杭）の転訛。（薩摩）日置郡東市来町。／ダンザッ：名詞。B。乱雑。…。（大隅）曽於郡大隅町。／ダンツケッ：名詞。B。燐寸。…。ランツケキ（蘭付木）の転訛。（薩摩）鹿児島市上福元町・日置郡東市来町、（大隅）肝属郡高山町。（また、ダンツケ：…。（大隅）曽於郡大崎町。／ダンツケキ：…。（大隅）曽於郡大隅町。）

カラダ：体。／ハラ：腹。／ヘラ：篦。／カワラ：瓦。／マクラ：枕。

シタガ：白髪。／シタメ：虱。／シタン：知らん。／カシタ：頭。／ハシタ：柱。

◎リ→語頭ヂ、語中尾イ

ヂ：名詞。B。利子。利得。…。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ヂキジン△[3]：名詞。B。琉球人。…。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。（また、＜礼儀知らず＞とも。）／ヂキュ△：名詞。B。琉球。…。（薩摩）鹿児島市上福元町。（また、ヂュキュとも。）／ヂク：名詞。A。利口。賢明。…。（大隅）曽於郡大隅町。／ヂッ：名詞。B。力瘤。…。（大隅）曽於郡大崎町。／ヂッパナ：形容動詞。立派な。…。（薩摩）鹿児島郡十島村宝島。／ヂャンボモッ△：名詞。B。…。リャンボウモチ（両棒餅）の転訛。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ヂュイヤ△：名詞。A。料理屋。…。（薩摩）鹿児島郡十島村宝島、（大隅）曽於郡大隅町。／ヂョザラ△：名詞。A。旋毛の二つある人。…。リョウザラ（両皿）の転義、転訛。（大隅）曽於郡大隅町。…。／ヂン：名詞。B。鈴。リン（鈴）の転訛。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ヂンキ：名詞。B。リンキ（悋気）の転訛。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。

トイ：鳥。／ハイ：針。／オドイ：踊り。／クイトイ：栗取り。

◎ル→語頭ヅ？、語中尾イ（一部促音）

ヅイヤ△：名詞。A。料理屋。…。（薩摩）鹿児島市新照院町・日置郡東市来町、（大隅）曽於郡大隅町。／ヅスバン：名詞。A。留守番。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。

スッ・スイ：為る。／タイ：樽。／ムラサッバイ：紫原（ムラサキバル、地名）。／カイカ：軽か（軽い）。／クイマ：車。

◎レ→語頭デ？、語中尾レ（一部イ）

デンゲ：名詞。B。紫雲英。…。（大隅）曽於郡輝北町。

ゴレ：御礼。／クレバ：来れば。

コイ：此れ。／ソイ：其れ。／アイ：あれ。／ドイ：孰れ。／ダイ：誰。／オイ：俺。／ワイ：われ（お前）。

◎ロ→語頭ド、語中尾ロ（一部ト）

ド：名詞。B。艪。…。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ドクッ：名詞。A。六部。…。（大隅）曽於郡大隅町。（また、ドクッドンとも。）／ドソッ：名詞。B。蝋燭。…。（薩摩）鹿児島市上福元町・新照院町・日置郡東市来町、（大隅）曽於郡大隅町。（ほかに、ドソッタテ・ドソッノクソも）／ドッグヮッド：名詞。B。六月十五日の縁日。祇園祭の一。…。ロクガ[ママ]ツドウ（六月燈）の転訛。（薩摩）（大隅）（諸県）全部。／ドッナ：副詞[ママ]。B。碌な。…。（薩摩）鹿児島市上福元町。

ツロ：燈籠[炉カ][4]。／コロガッ：転がる。／ヒログッ：広げる。

ウシト：後ろ。／ムシト：筵。／オモシトカ：面白い。

以上、ラ行音の変異については、次のように云うことができそうである。

①語頭では原則的にダ行音に変わると見ることもできそうであるが、ル・レについては類例が少なく、また例外となる語（類似・累々・瑠璃・ルンペン…、例示・レール・列車・蓮根…）も存することを考えると、簡単に断定することはできない。
cf. 福岡県久留米市方言などでも語頭リ→ヂの傾向は見られる。ヂクツ：理屈。／ヂコモン：利口者。／ヂッパ：立派。／ヂンゴ：林檎。…これは、［r］が、後続する母音［i］の影響で歯茎・硬口蓋に接する時間を長めた結果と見られる。或いは、薩隅方言においても、そのようなところからダ行音化が始まったものか。

②語中尾ではイ化する現象がリ・ル・レについて見られるが、これは従来云われていたような子音の脱落によるものではなく、母音の脱落によるものと思われる。
cf. 福岡県久留米市方言におけるレ→リ→イの現象。コリ・ソリ・アリ・ドリ・ダリ・オリ、また、コイ・ソイ・アイ・ドイ・ダイ・オイ。薩隅方言でもエ列音のイ列音化が起きることは、川辺郡川辺町方言などを見れば明らか[5]。薩隅方言におけるコイ…ワイは、それら頻用される語彙について、いったん久留米市方言におけるようなイ列音化の現象が生じ、のち熊本市方言におけるような母音の脱落・そり舌音化を経て、子音が［i］化したものと思われる。リは、これと同様の変化を起こしたものと思われる。ルも、母音が脱落してのちそり舌音化し、さらに［i］となったものと考えなければ、理解しがたい（［u］が残って［i］と混合したとは考えがたい。無声化する場合を除けば［i］［u］の区別は明確である。）。

③語中尾のラ・ロの一部がタ行音化する。これについては、上村孝二が＜一旦ダ行音化してのちシの影響で無声化した＞と説明した[6]が、シの後以外でダ行音化した確例が見当らない[7]ことを考えると、やや疑問が残る。むしろ、直接にラ行音→タ行音の変化が生じたと見た方が良いか（つまり、シに引きずられてラ行音の歯茎・硬口蓋に接する時間が長くなり、タ行音化した。シが無声音であったため、同様に無声音として変化し、ダ行音を経由することは無かった。と考える。）。

以上のことは、その傾向を強く持つ話者について見れば、かなり音韻論的レベルでの話として考えることができるが、多くの場合、そこにたどりつくこと無く沙汰止みとなった語彙論的・音声学的問題としてわれわれの前に有る。その規則性を云々することの意味が問われようが、方言記述に際して、完全に音韻論のレベルに達していなくとも或る程度の傾向性を持つ事象についてコメントしておくこと（それも、できるだけ精密に）は、やはり必要なことであろう。特に、何ゆえそうした傾向性ないし変異が生じたか、その過程を考えることは音韻論的にも音声学的にも重要な意味を持つと考えるものである。

2．薩隅周辺部方言のラ行音・ダ行音の変異

屋久島・下甑島・坊津町・国分市・隼人町・加治木町などの薩隅周辺部の方言では、ラ行音が語中尾で子音脱落を起こしア・ヤ・ワ行音化する現象が見られる（これは、音韻論的現象である。）。例えば、屋久島上屋久町方言では次のようである（集落により語形が少しずつ異なる）。

アーイ：蟻／ツア・ツヤ：顔／シュー・シューイ：汁／ハー：腹／ハイ：針／ムア：村／アブア・アブヤ：油／カルア・カルヤ・カールア：蔓／クサイ：鎖／ケムイ：煙／ッシャミ・ッシャーミ・シヤミ：虱／シューシ：印／タワー・ターワー：俵／ヒカイ：光／ヒライ：左／マックゥ・マクワ・マクヤ：枕

クサイ・ケムイ・ヒカイ等薩隅大部方言におけると同じ語形であるが、こちらは［r］の歯茎・硬口蓋への接触が弱化して子音が脱落し生じたものであり、変化の過程が異なるものと考えられる。つまるところ、薩隅方言では、語中尾のラ行音に関してその歯茎・硬口蓋への接触が強まる傾向と弱まる傾向の両様の変化が見られたことになり、かつてラ行音に強い動揺が有ったことが窺えるのである。同じような動揺は、隣接する琉球の諸方言にも有ったと見られ、トゥイ：鳥／ハイ：針／ヒキャイ：光といった薩隅方言におけると類似の語形が認められるのである。

なお、これに関連して、語中尾のダ行音のラ行音化という現象が屋久島・下甑島などに見られる。例えば、屋久島上屋久町方言では次のようである。ウレ：腕／ソレ：袖／ノロ：咽／ノロクビ：首／オロイ：踊り／カルア・カルヤ・カールア：蔓／スルメ：雀（すずめ→すづめ）／ナンラ・ナミラ：涙／ヒライ：左／エライ・ユライ・ヨライ：よだれ

このラ行音に関しては、上村孝二が、語頭に見られる本来のラ行音との区別をする話者の居ることを報告している[8]が、現在では紛れてしまっているようである。もし、そのような区別が有ったとすれば、それはこの現象がそれほど古くに起きたものではないことを示唆するものかもしれない。屋久島に隣りする種子島では、この現象が弱いながらも認められるが、ラ行音の子音脱落の現象は認められない。一方、国分市・隼人町・加治木町では、ラ行音の子音脱落は認められるが、ダ行音のラ行音化は認められないようである。その両方の現象を生じている屋久島・下甑島などの方言において、いずれの現象が早く生じたものか興味深いところであるが、にわかには決し難い。上村が報告した約30年前に変異ラ行音と本来のラ行音との区別がなお有ったことを勘案すると、語中尾のラ行音の子音脱落が生じて空き間が出来たところへ、語中尾ダ行音のラ行音化が生じ、その空き間を埋めたと見るのが妥当かとも思われる。

3．ゴンザ資料における関係事象

漂流民ゴンザの手に成るという『新スラヴ・日本語辞典』などには、次のような事象が認められる（アクセント記号は省略。）。

◎語頭ラ

ダングウィ（dangwï）：乱杭

◎語中尾ラ

アシガルノカシタ：足軽の頭（隊長）／カシタ：頭（君主…）／シタガ：白髪／シタメ：虱／シタン：知らん（理解できない）／シラカス：知らかす（訓導する）／シラスル：知らする／シラツチ：白土（白墨、チョーク）／ファシタ：柱

◎語頭リ

ヂョガイヤ：両替屋／ヂョフォ：両方／ディク～ディコ：利口／ディクツ：理屈／ディョ

フォンナカ（dyofonnaka）：両方の中（中間）／ディョミチ（dyomich'）：両道（岐路）

◎語中尾リ

アイ：蟻／アサイ：浅り（浅瀬）／イェイ：襟／イカイ：錨／イチリ：一里／ウガラクイ：大からくり（非常に賢い）／カチトイ：舵取り（人）／カナクサイ：金鎖／カラクイ：からくり（娯楽）／キッパイ：きっぱり／クスイ：薬／クンダイ：下りの／コイリ：小錐／コカナクサイ：小金鎖／コツリバイ：小釣針／コドイ：小鳥／コニワトリ：小鶏／コヤマドイ：小山鳥／シキリ：仕切り（境界）／ソイヨイトウゥ：それより遠く／ソイヨイワルィ：それより悪い／ソリ：剃刀／ソロイト：そろりと（静かに）／チェムキガワリ：手向きがわり（あおむけに）／チキリ：ちきり（秤）／ツクイトル：造りとる（造りあげる）／ツクイナヲス：造り直す／ヅモイ：どもり／ツルバイ：釣針／トイ：鳥／ナイ：姿…／ナイモン：なりもの（野菜）／ナカドイ：仲取り（助言者…）／ニワトイ：鶏／ネバイ：根ばり（根）／ノイ：乗り／ノイマワシ：乗りまわし／ノイマワル：乗りまわる／ノリ：糊／ノリ：のり（脳）／ファイトル：貼り取る（封印を取り去る）／ファランクダイ：腹のくだり（下痢）／フィダイ：左／フィチシリ：肘しり／フカイ：深り…／フカイモン：光り物（いなずま）／フカリ：光（晴天…）／フタイ：二人／フトイ：独り／フトイゴ：ひとりご（孤児）／フトイ：一人／フリフネ：ふり舟（丸木舟）／フォイクヤス：掘りくやす／フォイコム：ほうり込む（埋める…）／フォイチラカス：掘り散らかす／フォイツクル：掘りつくる／フォイナヲス：掘り直す／フォイフォガス：掘りほがす（掘り通ずる）／フォリ：堀／マイ：まり／マガイメ：曲がりめ／メリヤス：靴下／メリヤスツクイ：メリヤス作り（人）／メンドイ：雌鳥／モイェトノコイ：燃えた残り（燃え残り）／ヤイ：槍／ヤマドイ：山鳥／ユルイ：囲炉裏／ワガフォイコム：我が掘りこむ（自分を掘りこむ）

◎語頭ル

例無し。

◎語中尾ル

アシガルノカシタ：足軽の頭（隊長）／クルマ：車（荷馬車…）／シェイ：汁の方言形か。汁ならばシュイのはず／シュル：汁、塩漬水、スープ／ファユル：腫ゆる（腫れる）／マルカ：円い／ヤマダル：山樽（樽）

◎語頭レ

例無し。

◎語中尾レ

オイ：俺（私）／オモシテ：面白（い）ママ／コイ：これ／ソイ：それ／ソイヂャ：それぢゃ（やはり）／ソイヂェ：それで（何となれば）／ソイヨイトウゥ：それより遠く／ソイヨイワルィ：それより悪い／ダイ：誰／ドイ：何れ／ファイェ：腫れ／モイトッタト：漏れとったト（流れ出すこと）

◎語頭ロ

ド：蝋／ドゥ：牢／ドゥヤ：牢屋／ドクスン：六寸（指尺…）／ドソクノト：蝋燭の／ロ（lo）：蝋／ロクシェン（lokshen）：六千／ロクジュ（lokzhu）：六十／ロクネンノト（loknennot）：六年の／ログゥツ（logwats）：六月／ロッカクノト（lokkaknot）：六角の／ロッピャクノト（loppyaknot）：六百の

◎語中尾ロ

シトゥ：白う（白く）／シトカ：白か（白い）／シトミタマゴ：白味卵（卵白）／シトミ　メノ：白み、目の（目の白眼）／シロ：城／シンド：しんど（労働、緊張）／ムシト：筵／ユルイ：囲炉裏

これを見ると、次のようなことが云えそうである。

イ．語頭のラ→ダ、リ→ディ・ヂ、ロ→ドの現象は既に見られる。しかし、ロについてはロのままの語形も認められ、現象としての強い傾向性はいまだ見られない。

ロ．語中尾のリ・レ→イの現象も既に見られるが、ルはいまだルのままのようである。また、リもリのままの語形も認められ、なお現象としての圧倒的な傾向性は獲得していないようである。「これ」「それ」…などのレ→イは今日見られる語形のほとんどが既に見られるほか、「漏れとった」の「れ」のようなものまでイ化しており、興味深い。

ハ．語中尾のラ・ロがタ行音化する現象も既に見られる。しかし、ラ行音のままの語形も認められ、現象としての強い傾向性はいまだ見られないようである。なお、関連する語形としてシンドが有る。これが、「心労」に基づくものであるとすれば、上村説（語中のラ行音が一旦ダ行音化したのちシに引かれてタ行音化した）も首肯し得ることになるが、なお検討を要するもののように思う。

ニ．語中尾のダ行音の変異は認められない。これは、ゴンザが薩隅大部の出身者であったことによるものではないかとも見られるところで、興味を引く。ただし、先にも述べた如く該変異は比較的新しく生じたものと見られるので、なお検討を要することは云うまでもない。

4．おわりに

以上見て来た如く、薩隅大部方言におけるラ行音の変異は、既に18世紀前半ゴンザの時代に或る程度の様相を見せており、その後今日見るような傾向性をもつものとなったと見られる。その傾向性は、なお完全に音韻論的なものとはなっていないが、老年層の方言においてはかなり根強いものである。その傾向性の依ってきたるところを分析することは、音韻論的・音声学的に重要な意味を持つものと考えられる。それはまた、薩隅周辺部方言のラ行音・ダ行音の変異についても同様である。

［注］

1）後藤和彦『鹿児島方言の語法研究』（1994）等参照。

2）該辞典は、上村孝二によれば、語源説・分布地の解説等に問題とすべき点が有り利用に注意を要するとのことであるが、ここに示した分については一部を除き問題無いものと判断した。

3）以下、△を付したものは、元の形が拗音形と推定されるもの。

4）前田富祺氏の説によれば燈籠は古くは燈炉であったらしい（詳しくは岩波講座日本語9『語彙と意味』（1977）所収の氏の論考を参照されたい）。

5）拙稿「川辺町の方言」（『川辺町の民具』所収1993）や木部暢子の同名（同書所収）論

文等参照。

6）「九州方言の概説」（『講座方言学』9　1983）に手際良くまとめられている。

7）後に述べる如く、不確実な例としてシンド（「心労」からか）が有るが、それを除けば皆無である。

8）「屋久島方言の研究－音声の部－」（「文学科論集」2　1966）。

※本稿は、筆者による平成10年度秋季国語学会における同名研究発表の予稿集原稿に手を加えて成ったものである。